

「なら」と「から」はどう違うか

村山 康雄

Differences between *nara* and *kara*

Yasuo Murayama

Akatsuka (1985), discussing Japanese conditionals from the speaker points of view, claims that *nara* is unique in that it expresses 'newly-learned' information which the speaker regards as true. And she distinguishes it from *kara*, to which in some situations it is very close in meaning. She claims that the speaker uses *nara* when he first realizes something and that as the time passes *kara* comes to be used.

In this paper I will discuss the use of these words from some other points of view.

- 1) the S_1 of S_1 *nara* S_2 expresses 'hypotheticality', while that of S_1 *kara* S_2 'conviction'
- 2) the S_1 of S_1 *nara* S_2 expresses 'condition', while that of S_1 *kara* S_2 'reason'
- 3) the S_2 of S_1 *nara* S_2 must be a subjective statement, while that of S_1 *kara* S_2 can also be an objective statement
- 4) the S_1 of S_1 *nara* S_2 originates from without the speaker, while that of S_1 *kara* S_2 from within

These combine to make the choice of these two words.

1. Akatsuka (1985) の分析

1.1 「新獲得情報」

Akatsuka は日本語の条件を表わす語 (conditional) を分析し、「なら」は元来「と」、「たら」、「ば」同様「仮定」を表わす語であるが、話し手が「真」であるとみなしている情報をも前件で表わすことができると主張している。

- (1) A: この冬ぼくはスキーに行くつもりだ
B: 君が行くなら、ぼくも行くよ

BはAがスキーに行くことをこの時初めて知り、かつそれが「真」であるとみなしており、そ

これは「仮定」を表わす「もし」がこの場合現われることができないことで証明されるとしている。

(2) *もし君が行くなら、ほくも行くよ

もちろん、「なら」の前件が「不確実」なことを表わす場合には、「もし」が用いられることができる。

- (3) A: ほく、この冬スキーに行くかも知れないよ
B: もし君が行くなら、ほくも行こうかな

Akatsukaはこの話し手が「真」であるとみなしている情報を「新獲得情報」(newly-learned information)と呼び、次のような文の前件も「新獲得情報」を表わしていると言っている。

(4) (観光地で)

こんなにいい所なら、もっと早く来れば良かった

(4)では話し手は前件で景色を見て驚いたことを表わし、そして後件でもっと早く来なかったことに対する後悔の念を表わしている。Akatsukaはこのような文を「驚き・後悔」を表わす条件文('surprise-regret' conditional)と呼んでいる。

そして条件を表わす文はその前件に次の三つの話し手の態度を表わし、「なら」のみが「驚き」(＝「新獲得情報」)を表わせると述べている。

- (5)こんなに喜んでくれるなら、もっと早く来ればよかった「驚き」(surprise)
(6)もしあいつが来るなら、ほくは行かないよ「不確実」(uncertainty)
(7)君、今日の会議に出ないの 君が出るなら、ほくも出ようと思っていたんだが「一(負)の確信＝反事実」(negative conviction)

1.2 補文化詞の選択

Akatsukaはこの「新獲得情報」という概念を用いれば、日本語の補文化詞の分布も説明できるとしている。

- (8) 私は彼が病気である {この・の(を) / *と} 知っている
(9) 私は彼が病気だ {と / *こと・*の(を)} その時知った

補文化詞の「こと」、「の」は話し手が補文が「真実」であるとみなす際用いられ、他方「と」は元来は「引用」の役割を持ち、「伝聞」、「推量」、「疑い」などに用いられ、「不確実」なことや、「思い込む」のような語と共に現われ「反事実」であることを表わすとされている。それ故(8)に見られるように、「知っている」という動詞はその補文に「真実」であるものを取ることで「こと」、「の」が用いられる。ところが、(9)では「知る」という動詞であるにもかかわらず「と」が用いられる。Akatsukaはこれを説明するのに(9)の「知る」は(8)の「知っている」とは意味

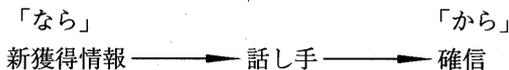
が異なると主張する。すなわち「知る」は「知るようになる」「get to know」の意味で「知っている」「know」とは異なり、「状態」ではなく「動作」,「変化」を表わす。今まで知らなかったことを, その時点で「初めて知った」わけである。「驚き」を表わす「なら」同様話し手はその時「新情報」を獲得したのである。この場合「新獲得情報」は「伝聞」「推量」などと同じ仲間に入る。

1.3 「なら」と「から」

さて Akatsuka は (1) の例の場合, 話し手 B はその後彼の妻に電話かなにかで自分がスキーに行くことを伝える際には, 「なら」ではなく「から」を用いていると言っている。

(10) Aさんがスキーに行く {から/*なら}, 僕も行くことにするよ

つまり時間が経つと「なら」ではなく「から」が用いられるようになると主張する。「から」は話し手が情報に対して「確信」を持っている状態を表わす。情報は「時間の経過」とともに「新獲得情報」から「確信」に変ると言う。



時間の経過

図 I

「新獲得情報」 / 「知識がある状態」

現実相	非 現 実 相		
知識	新獲得情報	不 確 実	反 事 実
「から」	—— 「なら」などの条件を表わす語 ——		

(Akatsuka 1985 に基づく)

図 2

2. 他の観点からの分析

Akatsuka は「時間の経過」により「なら」が「から」になると主張しているが、そうではなく他の要素がこれらを区別することをここで示す。

2.1 「なら」の前件は「仮定」、「から」の前件は「確信」を表わす

「なら」は「と」、「たら」、「ば」と同様元来その前件は後件の「条件」を表わす語であるから、前件の内容は「真」でなくあくまで「仮定」である。他方「から」は「理由」を表わすのであるから、少なくとも話し手がそう信じている「確信」でなければならない。このことから「なら」と「から」の区別をする次のような基準が生まれる。

2.1.1 「もし」と共起できるか

今述べたように「なら」は「仮定」を表わすのに用いられるので、「仮定」を表わす「もし」と共起することができる。他方「から」は話し手の「確信」を表わすので「もし」と共起できない。

- (11) もし彼女が来ているなら、ぼくは帰るよ
- (12) *もし今日先生がみえるから、家の中をきれいにしておかなければ

2.1.2 前件は「事実」を表わせるか

- (13) *夏になるなら、暑くなるね

夏は毎年来るのであるから、「夏になる」というのは事実である。それ故「仮定」を表わす「なら」は用いることはできない¹。他方「から」は話し手が知識を持っている状態である「確信」を表わすので、次の例のように「事実」と共に用いることができる。

- (14) 今年はうるう年だから、二月は例年より一日多い

2.1.3 前件は話し手自身のことを言及するのに用いられるか

「なら」は「仮定」を表わす。つまりその前件が本当かどうか分からない「不確実」あるいはそうでない「反事実」を表わす。それ故話し手が自分自身の予定、意志、行動などを知らないというのはおかしいから、「なら」はこれらを表わすのに用いられない²。一方「から」は話し手の「確信」を表わす。話し手が自分自身のことを知っているのは当然であるから「から」は用いられる。

- (15) *ぼくが明日のパーティに出る (つもり) なら、君も出席しますか
- (16) ぼくはこの夏一カ月ほどアメリカに行く (つもりだ) から、その間のことはよろしく頼むよ

2.2 「なら」の前件は「条件」、「から」の前件は「理由」を表わす

2.2.1 「なら」の前件は後件の内容の対象となるものに関係があることか

「なら」は「条件」を表わすわけであるから、前件の情報は後件の内容である「依頼」、「勧誘」などの対象となるもの〔人・事〕に関係があることでなければならない³

ある家にそのこの主人の客であるAさんが訪問中で、主人とその妻が相手をしていると、客のAさんが、

(17) そろそろ帰ります

と言ったとしよう。そうすると主人は客に向かって

(18) お帰りになるなら、そこまで送りますよ

と「なら」を用いて答えるだろう。これは後件で「(あなたを)送る」と(帰る本人である)聞き手に言っているのであるから、前件の「(あなたが)帰る」という情報は(後件の)送られる対象であるあなたに関係がある。それ故「なら」が用いられる。

また、Aさんの発言を聞いて妻に対して「一緒に送って行こう」と誘う場合にも

(19) Aさんが帰られるなら、送って行こうか

と「なら」を用いるだろう。「(Aさんを)一緒に送って行こう」と聞き手である妻を「勧誘」しているのであるから、「勧誘」の対象である妻も行くのである。それ故前件の情報は(自分にはもちろん)妻にも関係がある。

ところが、妻に「自分一人で送って行く」ということを言いたい場合には

(20) Aさんが帰られるから、そこまで送って来るよ

と「から」を用いるだろう。これは、自分だけが送って行くのであるから、前件の「Aさんが帰る」という情報は聞き手の妻には関係がない。それ故「から」が用いられる。後件の「自分が送って行く」理由を示しているだけである。

また、自分は行かないで、妻に客を送って行くことを「依頼」する時にも

(21) 悪いけど、Aさんが帰られるから、送って行ってくれる

と、(20)の場合同様「から」を用いる。自分の客であるから、「送って行く」ことを「依頼」する対象である妻には「Aさんが帰る」という情報は関係がない。それ故「から」が用いられる。もちろん、Aさんが妻にとっても(送って行くような)客であれば「なら」も用いられる。

(22) Aさんが帰られるなら、送って行ってあげたら

2.2.2 前件の逆が含意されているか

「なら」は「条件」を表わすわけであるから、当然その「条件」が満たされないことも暗黙のうちに含まれているはずである。

(23) 一生懸命勉強するなら、あの本買ってやるよ

は(24)を含意している。

(24) 一生懸命勉強しないなら、あの本買ってやらないよ

それに対して「から」の前件は後件の「理由」を表わすので、前件の逆は考えられていない。

(25) おまえはよく勉強するから、あの本買ってやるよ

(26) *おまえはよく勉強しないから、あの本買ってやらないよ

2.2.3 後件に「事実」が現われるか

坂原(1990)は次の例を挙げ、「なら」はどのような場合にも後件に「事実」を取れないことを述べ、Akatsukaの理論の不備を指摘している。

次のやりとりが行われる前にAが新しいスキー帽を被っているのをBが見ていたとしよう。これはBにとっては事実である。

(27) A:これからスキーに行きます

B: きみはスキーに行く {から/*なら}, そのスキー帽を買ったのですね

Akatsukaの理論によれば、Bは「Aがスキーに行く」ことをこの時点で初めて知ったわけであるから「なら」が用いられなければならない。ところが、ここでは「から」でないといけない。

前節で「なら」の前件の「条件」にはそれが満たされない場合、つまり前件の逆が含まれていることを見たが、その場合、(23)―(24)で分かるように当然後件の帰結も逆になる。しかし後件が「事実」であるということは、その逆は含意されていないわけであるから、当然前件の逆も含まれていない。それ故後件が「事実」である場合には「条件」を表わす「なら」は用いられない。それに対して「から」は前件にはその逆が含まれないから、当然後件にもその逆は含意されていない。それ故「事実」が現われても差支えない。

2.3 後件が主観的表現か客観的表現か

「なら」は後件に「依頼」、「要求」、「希望」などを表わす主観的表現しか取れない。他方「から」は前節で見たように「事実」をも含めた客観的表現をも取れる。例えば子供が遊んでいるのを見て、母親は次のように言えるだろう。

- (28) そこで遊んでいる {なら/*から}, 手伝ってよ
 (29) そんな所で遊ぶ {から/*なら}, 怪我をするのよ

(28)の後件は「依頼」を表わす主観的表現である。一方、(29)の文全体はそれが用いられる状況では「そこで遊ぶな」という「警告」とも取れるが、後件自体は「(そのような所で遊ぶと)怪我をする」という客観的表現である。

3. 前件はどこに由来するのか

ここでは「なら」の前件は話し手以外から、他方「から」のそれは話し手に由来する、言い換えれば、前者は話し手以外の情報、後者は話し手自身の情報であるという観点から、「なら」と「から」の区別をし、これを裏付けるいくつかの現象を見る。

3.1 「たしかに」と「きっと」との共起

Alfonso (1966) は「たしかに」はその情報の「確かさ」が何か外部の根拠に基づいている時用いられ、他方「きっと」はそれが「話し手個人の確信」であると述べている。つまり、前者が用いられるのはその情報が話し手以外からの情報である時、後者はそれが話し手自身の情報である時と言える。

- (30) A: あの人誰ですか
 B: {きっと/*たしかに} 田中さんですよ
 (31) A: あそこにいるのは田中さんですね
 B: ええ, {たしかに/*きっと} 田中さんです

Kuno (1973) などが指摘しているように「なら」の前件は話し手以外に由来する。他方「から」のそれは一章および二章で見たように、話し手が知識を持っている状態、すなわち話し手の「確信」を表わす。それ故「なら」は「確かさ」が外部の根拠にあることを示す「たしかに」と共起し、「確かさ」が「話し手自身の確信」であることを示す「きっと」とは共起せず、逆に「から」は「確かさ」が話し手にある「きっと」と共起し、「たしかに」とは共起しない。

- (32) 今度の日曜日は {きっと/?たしかに} 晴れるから、ピクニックに行こうよ
 (33) A: 来週に日曜日に太郎が遊びにくるよ
 B: {たしかに/?きっと} 来るなら、一緒に釣りに行こうよ

3.2 話し手自身に関することを言及するのに用いられるか

2.1.3で「なら」は「仮定」を表わすので話し手本人に関することを述べるのに用いられないが、他方「から」は「確信」を表わすので話し手に属することを述べるのに用いられることを見た。これを情報源の観点から見ると、「なら」の場合はその前件が話し手以外の所にあるので、そこから、例えば他人から自分の「予定」、「意志」などを知るのはおかしいから、これらを表わせないし、他方「から」の場合には前件が話し手自身に由来するので自分に属することを表わせ

るとも言える。

3.3 前件を疑うことができるか

「なら」の前件は話し手以外の情報なので、話し手はそれに対して疑問を持つことができる。他方「から」のそれは話し手自身の情報なので、その自分の情報を疑うことはおかしい。

(34) A: 明日ほく学校を休むつもりだ

B: 君が休むなら、ほくもさぼるよ でも君本当に休むの

(35) 今日はお母さんが出かけるから、家で留守番をしなければなりません *でもお母さん本当に出かけるのかな

おわりに

本稿ではまず Akatsuka (1985) の「なら」と「から」の違いはそれらが用いられる時の差である、すなわち「時間の経過」とともに「なら」が「から」に変るという説を紹介した。その後いくつかの別の観点—1)「なら」は「仮定」を表わし、「から」は「確信」を表わす 2)「なら」は「条件」、「から」は「理由」を表わす 3)「なら」の後件は主観的表現でなければならぬが、「から」のそれは客観的表現も取れる—からこれらの語の違いを見た。また「なら」の前件は話し手以外の、「から」のそれは話し手自身の情報であるということを示す現象を見、この観点からも「なら」と「から」の違いを考えた。これらの要素が影響し合い「なら」と「から」の使用を決めると思われる。

注

- 1 「なら」のこの特徴については Kuno (1973) を参照。
- 2 これについては Kuno (1973) を参照。
- 3 情報とそれに係わる人との関係について、Kamio (1979)、神尾 (1985) は「情報のなわ張り」(territory of information) という概念をみ出し、次のような興味深い現象を説明している。
ある会社の部長が自分の部屋で知人と話をしており、そこへ部長の秘書が入って来て、次のように告げたとする。

(1) 秘書: 部長、三時から会議があります

そこには知人もいるのだから、その知人も部長と同じく「三時から会議がある」という情報を得たはずである。そして三時が近づき、部長が知人にもうすぐ会議が始まるから、これ以上話をしているわけにはいかないことを伝える時には次のように言うだろう。

(2) 部長: これから会議があります (ので)

一方、知人の方が先に会議が近づいたことに気づき、部長の許を辞そうとする時には(3)のように言わないで、おそらく(4)のように言うだろう。

- (3) 知人: *部長は三時から会議があります (ね)
 (4) 知人: 部長は三時から会議があるみたいです
 会議があるようです (ね)

同じ情報を得たはずにもかかわらず、なぜ部長とその知人は異なる言い方をするのだろうか。また秘書はなぜ部長と同じ言い方をするのだろうか。神尾は情報には話し手にとって心理的に「近い」と「遠い」ものがあると説明する。ここでは、「三時から会議がある」という情報は、部長にとっては自分が出席する会議であるからその情報は自分に「近い」、すなわち自分の「なわ張りに属する」ものである。それで文末に「直接形」(「断定形」)を用いる。一方、知人にとってはその情報は自分には関係のない情報である。すなわち「遠い」、自分の「なわ張りに属さない」情報であるため、「間接形」(「ようだ」、「らしい」、「そうだ」など)を用いる。部長の秘書が部長と同じ「直接形」を用いるのは、秘書にとっては自分が仕える部長の予定は自分の「なわ張りに属する」情報であるからである。神尾はどのような情報が話し手にとって「遠い」か「近い」かを決定する条件を詳しく述べている。

[参考文献]

- Akatsuka, Noriko (1985) "Conditionals and the epistemic scale", *Language* 61-3.
 Alfonso, Anthony (1966) *Japanese Language Patterns*. Tokyo: Sophia University Press.
 Kamio, Akio (1979) "On the notion of speaker's territory of information: A functional analysis of certain sentence-final forms in Japanese", in G. Bedell et al (eds.) *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*. Tokyo: Kenkyusha.
 神尾昭雄 (1985) 「談話における視点」『日本語学』Vol.4, No.12.
 Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge: MIT Press.
 Martin, Samuel E (1975) *A Reference Grammar of Japanese*. New Haven: Yale University Press.
 McCawley, Noriko A (1978) "Another look at *no*, *koto*, and *to*: Epistemology and complementizer choice in Japanese", in John, Hinds and Irwin Howard (eds.) *Problems in Japanese Syntax and Semantics*. Tokyo: Kaitakusha.
 Murayama, Yasuo (in preparation) "Conditionals and the information".
 坂原 茂 (1990) 「談話研究の現在と将来」『言語』Vol.19, No.4.